

石崎地区遺跡群

大坪遺跡Ⅲ

—福岡県糸島郡二丈町大字石崎所在遺跡の調査—

二丈町文化財調査報告書 第25集



200

二丈町教育委員会

序

初期稻作文化の集落として知られる石崎地区遺跡群一帯は、住宅化の波もなく、未だ、田園風景が残る地域であります。同地では、これまで稻作開始期の集落跡（曲り田遺跡）、支石墓を含む墳墓群（矢風遺跡）、旧河川（大坪遺跡Ⅰ）などが調査されており、平成5年度に弥生初期の水田と水路（大坪遺跡Ⅱ）が確認された事によって、稻作文化を構成する諸要素が全て出揃いました。このため、改めて同遺跡群の重要性を再認識させられ、稻作文化の解明には絶好のポイントである遺跡と断言できるでしょう。

本書掲載の遺跡につきましては、町道拡幅に伴う狭小な調査面積であります。平成5年度に調査した水路の延長部分が確認され、水田地帯の北への広がりを探る上で貴重な調査となりました。

今後、本書が考古学研究の一助となるばかりか、次代へ残すべき同地の保存問題に役立てれば幸甚であります。

平成12年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 小川 勇 結

例　　言

1. 本書は、町道小学校～六反田線拡幅工事に伴い、発掘調査した記録である。
2. 調査は、二丈町教育委員会が主体となり、平成6年11月19日より12月2日まで実施した。
3. 遺構実測ならびに遺構写真撮影は古川が行い、空中写真撮影は(有)空中写真企画に委託した。
4. 本書掲載の遺物の実測及び写真撮影は、古川、須古井陽子嬢が行った。

目　　次

第I章 はじめに	頁
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第II章 位置と環境	
1. 遺跡の位置と環境	1
2. 大坪遺跡の歴史的環境	3
第III章 調査の記録	
1. 調査の概要	7
2. 遺構と遺物	7
3. まとめ	25
第IV章 付載	
石崎地区遺跡群について	26
第V章 おわりに	32

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成6年10月、一貴山小学校周辺の宅地化に伴い、比較的交通量が増加していた小学校～六反田線の拡幅工事が町建設課により計画され、町教育委員会としては、協議の必要性を提示していた。その後、11月より既に工事は着工されているとの打診を受けたため、担当者が急ぎ、現地確認を行ったところ、工事による床面が遺構面まで達していることが判明し、土器の散布ならびに杭列が確認がされた。このため、即時、工事の中止を申し入れ、また、同時に建設課に対しては同地の重要性と埋蔵文化財調査の必要性を提示、協議に入ったものである。協議では、着工済である上、道路がスクールゾーンとなっている点を考慮して、翌日より緊急調査に入る運びとなった。

2. 調査の組織

発掘調査ならびに報告書刊行事業に従事した組織は、以下に記すとおりである。

発掘調査（平成6年度）

調査主体 二丈町教育委員会

総括 教育長 吉村昌幸
教育課長 庄島正
庶務 社会教育係長瀬戸利三
調査 社会教育係主事 古川秀幸

報告書刊行事業（平成11年度）

調査主体 二丈町教育委員会

総括 教育長 小川勇吉
教育課長 青木慎夫
庶務 社会教育係長 川島節雄
調査 社会教育係主事 古川秀幸

第Ⅱ章 位置と環境

1. 遺跡の位置と環境

二丈町は、糸島半島の西部に位置しており、その地形は、北側は玄界灘に面しながら、南西側よりは脊振山系の山々が海岸線近くにまで迫っているという特徴がある。このため、その町土の大半は、山林部によって占められる事となり、町面積57.07km²の内、24.7km²の平野しか有していない。しかしながら、その狭い平野部の中でも最も広域な面積を誇る一貴山・深江平野では、一貴山川の肥沃な恵みによって古代より有数の稻作生産地であった事が考えられ、これをバックにかなりの権力が集中していたものと言える。また、この事は、現在確認されている町の遺跡の8割近くがこの地域に集中していることからもうなづけるものである。

これらの遺跡の中では、本書掲載の大坪遺跡や稻作開始期の集落遺跡である曲り田遺跡等が立地している石崎地区遺跡群が著名であり、稻作開始以前である縄文時代中期後半より遺構が広がっている状況は、それを基盤に稻作文化自体が展開していったと証明できるものであろう。また、古墳

1. 大坪遺跡
2. 曲り田遺跡
3. 曲り田周辺遺跡
4. 矢風遺跡II
5. 矢風遺跡
6. 森園遺跡
7. 濱崎・中牟田遺跡
8. 上深江・小西遺跡
9. 木舟・三本松遺跡
10. 二丈中学校校内遺跡
11. 井牟田遺跡
12. 中道遺跡



第1図 主要弥生遺跡位置図

時代においては、糸島地域最大の前方後円墳である一貴山銚子塚古墳も平野北東部に立地しており、その副葬品である三角縁神獣鏡を含む10面もの青銅鏡は、考古学研究史に残る遺物である。こうした重要な遺跡が存在している陰には、当地の地理的環境の特殊性からくるものと言え、玄界灘という媒体によって、大陸、半島からの先進文化をいち早く摂取し得る事ができたためと言い換える事ができる。また、弥生時代中期、「伊都国」成立以後においては、西の玄関口として交易の拠点となった事も窺えられ、弥生時代の後期代における遺跡からは、かなりの半島系遺物の出土が認められる状況にある。このような地理的環境からくる当地の重要性は、後の律令時代へも引き継がれており、「深江駅家」として推定している大型建物群が検出された塙田南遺跡やこれと同様の性格と考えられる豊富な輸入陶磁器が出土した曲り田遺跡では、「西海道」と考えられる古代道路が検出されており、当初より大陸との交易のための交通網が整備され、これにより当地が発達していくものと考えてよい。この事は、中世以後に至っても同様で、海岸線近くにある豪族居館木舟の森遺跡からは膨大な数の輸入陶磁器類が出土、その濠に囲まれた強固な館の構えからは、深江地域が交易の拠点として成り立ち、中央から重要視されていたためと言えよう。

2. 大坪遺跡の歴史的環境

本書掲載の大坪遺跡は、石崎丘陵東側縁辺部に位置しており、今回で3度目の発掘調査となる。同地区でのこれまでの調査においては、昭和63年度に居住区、生産地、墓域が大まかに確認されており、前期を主体とする23基の甕棺墓の他、旧河川が検出されている。また、平成5年度における第2次調査においては、糸島地域では初の確認となった弥生期の水田及びに前の旧河川より引かれたと考えられる用水路、甕棺墓1基が出土している。このほか、平成元年度には、大坪遺跡と連続する矢風地区（矢風遺跡）の微高地において、支石墓4基、木棺墓5基、甕棺墓39基という大規模な墓域が調査され、これまで不透明であった石崎地区の古地形が大方復元されている。また、それまで、石崎丘陵鞍部の曲り田地区（曲り田遺跡）が拠点と考えられていた遺跡群の中心が、丘陵南東側から東側の縁辺部にかけての地域であった事が判明し、今後の調査において参考となる貴重なデータとなっている。本遺跡を含め、同地の最重要課題である稻作開始期の諸問題については、平成7年度に、矢風遺跡第2次調査により縄文後期中頃（阿高式土器期）の遺構が出土している。これにより、当地における稻作の開始期段階では、縄文期の文化基盤の下地のもとに半島より摂取された事が伺われ、この後、展開、拡散していくと言う事が想定され得るものである。これと似た状況は、同じ平野内の一貴山川左岸の上深江 小西遺跡（縄文後期中頃：北久根式土器期）をはじめ、前原市宮ノ前遺跡（縄文後期初頭：中津式土器～福田K2式土器期）、志摩町新町遺跡（縄文後期初頭：福田K2式土器期）など糸島地域全域で確認されており、今後、ますます類例が増加するものであろう。

石崎地区遺跡群の考察については、最終章において論述しているため、この項では言及しないが、脊振山系の山より広がる広域な洪積台地上には多くの生活面があり、微高地やその間に入り組む底湿地帯には、先進文化を受け入れ、発展させるだけの生産基盤を生む能力が高かったものと言えよう。



第2図 石崎地区遺跡図 (S=1/50000)

第1表 石崎地区遺跡群発掘調査一覧

地点	遺 跡 名	原 因	調査年度	報 告 書	備 考
I	石崎 曲り田遺跡	国道202号線 バイパス建設	1980	『石崎 曲り田遺跡』 I II III 1983~1985	福岡県 教育委員会
II	曲り田遺跡 第2次調査	農協カントリー エレベーター建設	1985	『石崎 曲り田遺跡 第2次調査』 1986	二丈町 教育委員会
III	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1987	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 III 1993	二丈町 教育委員会
IVa	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1988	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 IV 1993	二丈町 教育委員会
IVb	曲り田周辺遺跡	農協用地拡幅	1988	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 IV 1993	二丈町 教育委員会
V	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1989	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 I II 1991、1992	二丈町 教育委員会
VI	大坪遺跡	県営ほ場整備	1988	『大坪遺跡』 1995	二丈町 教育委員会
VII	矢風遺跡	農協支所建設	1989	未 報 告	
VIII	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1990	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 V 1996	二丈町 教育委員会
IX	曲り田周辺遺跡	町運動公園建設	1991	『石崎 曲り田周辺 遺跡』 VI 1998	二丈町 教育委員会
X	大坪遺跡 II	県営ほ場整備 調整池建設	1992	『大坪遺跡』 II 1995	二丈町 教育委員会
XI	曲り田周辺遺跡	町運動公園 進入道建設	1993	未 報 告	
XII	矢風遺跡 第2次調査	個人農地区画整理	1993	『矢風遺跡』 第2次調査 1997	二丈町 教育委員会
XIII	大坪遺跡 III	町道拡幅工事	1994	今 回 報 告	



大坪遺跡III 調査区全景

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要

前章でも述べたとおり、調査は既に着工していた工事をストップさせて実行している。このため、調査区自体についても既に拡幅工事により床掘りが終了していた箇所をそのまま使用したために、拡幅工事幅の細長い形状を呈す事となり、その面積も $2\text{m} \times 53\text{m}$ を測る 106m^2 という狭小な調査範囲となった。また、便宜上、第1地点（溝状遺構中心）、第2地点（第1地点東側）とに分けて、呼称する事とした。発掘調査自体については、既に工事により遺構面（青灰色シルト土）が露出して、呼称する事とした。発掘調査自体については、既に工事により遺構面（青灰色シルト土）が露出していた事もあり、重機などは投入せず、人力による遺構検出作業から入った次第であるが、精査前にはかなりの遺構が破壊されていたものと考えられる。

出土遺構については、平成5年度に確認した3号溝状遺構の延長部分とその東側の杭列、また、無数の足跡を検出しているだけであるが、第2地点においては、東側へ進むほど遺構面がなお、深くなっている、前回の調査の状況から考えても下層及び弥生期の水田面の存在を確実視していたものの、調査区の狭さにより発掘は断念せざるを得なかった。

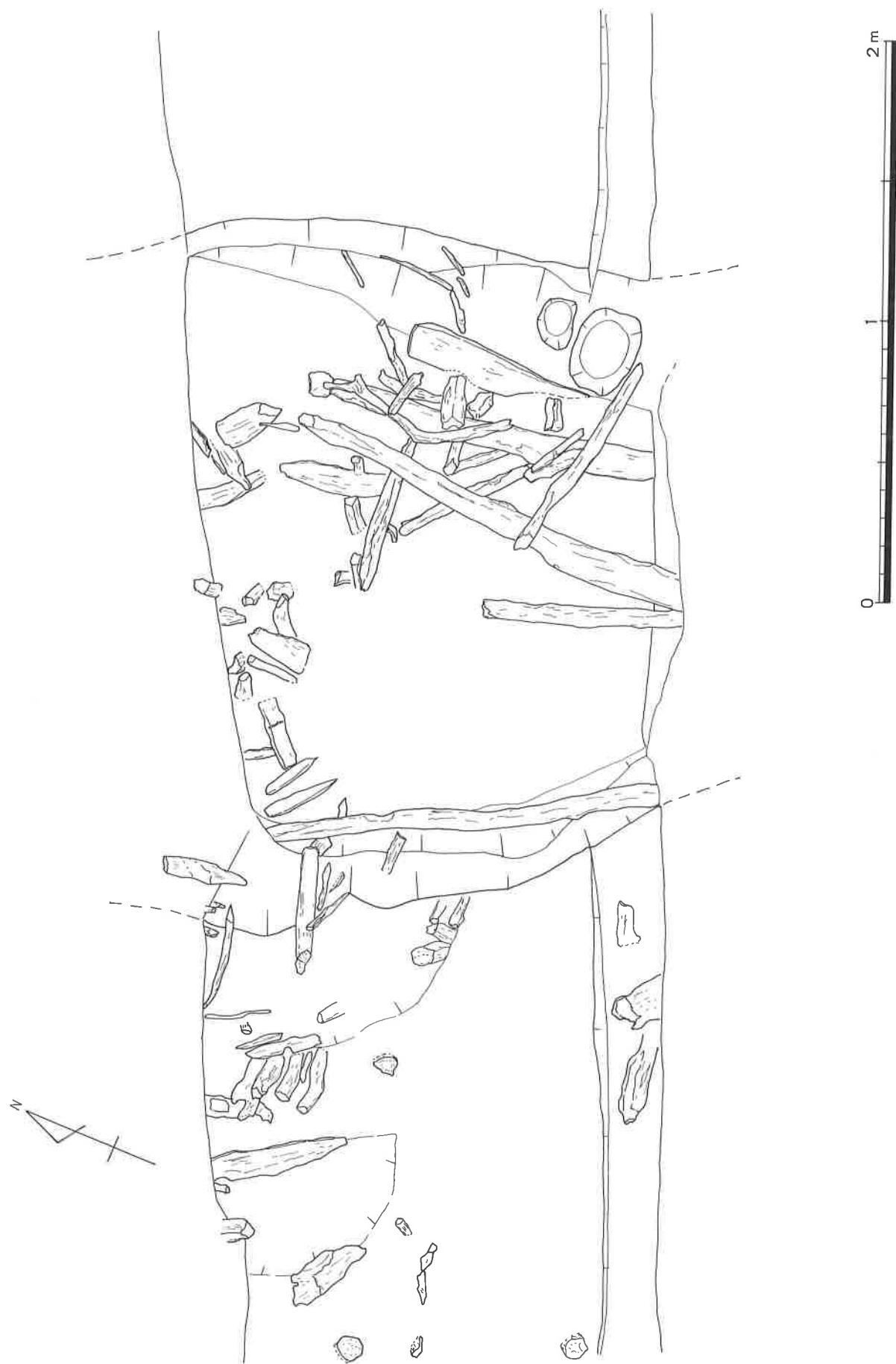
2. 遺構と遺物

第1地点（第3図）

溝状遺構（第3図・第4図）

第1地点中央部で検出した溝状遺構であり、平成5年度に調査した3号溝状遺構の延長部分と考えられる。調査区の関係上、2mの長さしか調査を行えなかつたが、幅は2.3m、深さ70cmを測るものとなった。遺存状況的については、前回の調査で検出した箇所よりは悪く、溝側面を護岸したと考えられる棒状の木材や板材は現位置を保っているものは少なく、それを止めるための木杭も多くはなかった。また、水田部へ水を供給する堰等の施設も認められていない。出土土器については、前期中頃より後期中頃まで含まれているが、その主体は中期後半であると言える。

次に堆積状況（第5図）を検討してみたい。現在の道路面（アスファルト面）より70cmまでは、現道工事による客土層（黄色土、グリ石混じりの淡茶褐色土）であり、その下には淡茶褐色土（旧水田面）と明黄色土（水田床土）が25cm～30cmほど認められた。次に確認されたものが、30cm程の厚さの弥生時代中期を中心とする遺物包含層（淡茶色粘質土）であるが、遺物量はさほど多くはなかった。この包含層の直下に当たるほぼ同色の面は、近世に当たる遺構面と考えられたが、遺構自体は確認されていない。また、次ぎには、青灰色シルト土が現われているが、これより溝状遺構が切り込んでいる状況や木杭列の検出状況から見て、弥生期の遺構面である事は間違いないであろう。溝状遺構内の堆積状況では、上層部の暗黒色粘質土と目の粗い砂質土が厚く、両土の間に白色強い目の細かい砂質土が咬んでいた。また、下層部は黒色粘質土があり、地山である青灰色シルト土に至っている。木杭の検出状況を考えてみると下層部の黒色粘質土から入っているものは理解できるが、上層部の間層よりも打ち込まれている事が認められるため、この間層である砂質土が何らかの水浸層であり、この直後にも杭が打たれたものと解釈している。



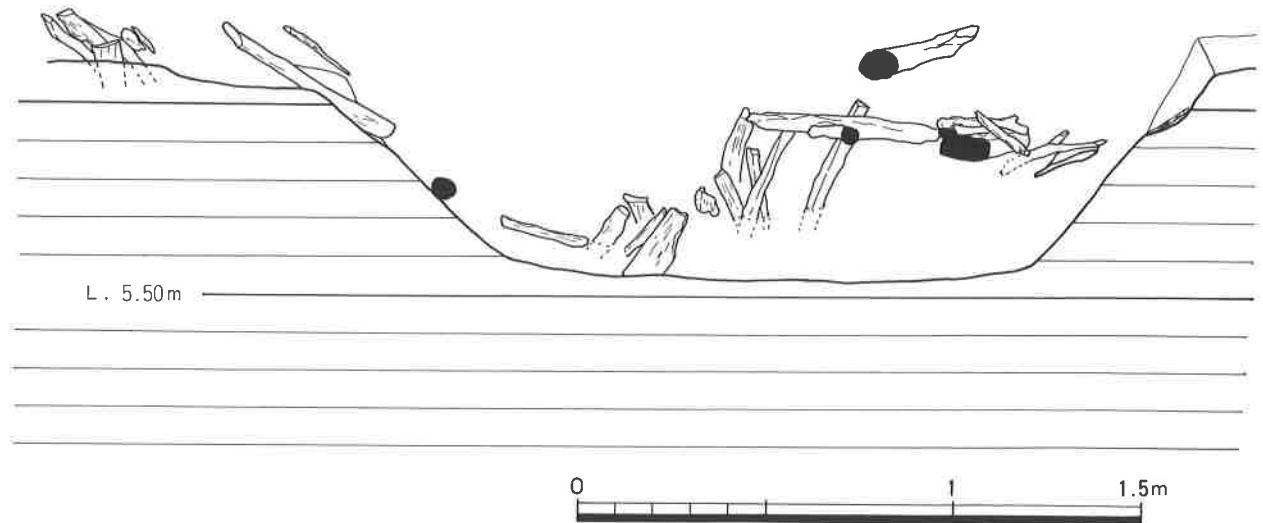
第4図 3号溝状遺構実測図 ($S = 1/20$)



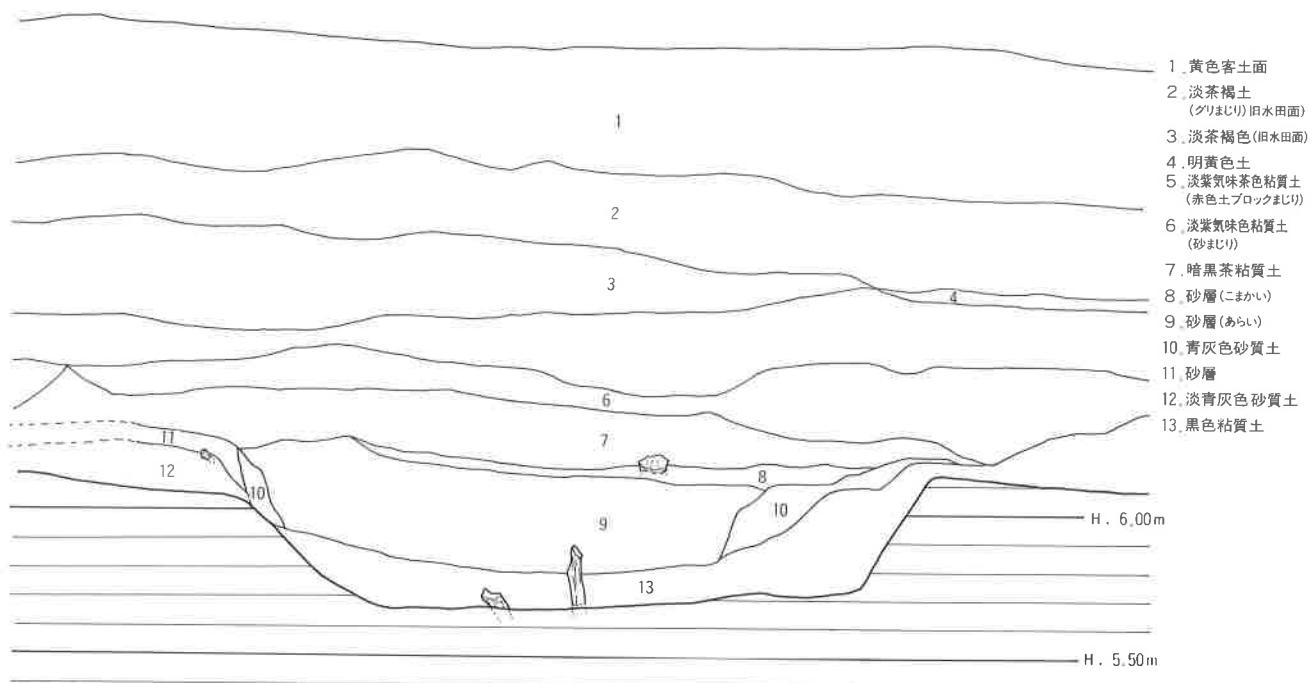
3号溝状遺構全景



3号溝状遺構近景



第5図 3号溝状遺構断面 ($S=1/20$)



第6図 3号溝状遺構土層図 ($S=1/20$)

溝状遺構構内での遺物の出土状況については、上層において弥生後期中頃の完形の楕円形土器が出土しており、また、比較的遺存状況の良い中期後半代の甕形土器も出土している。溝中位より下位にかけては、中期後半代を主体とする破片が多く出土し、前期代に上がる碎片も含まれていたが、極端な湧き水のために、層位ごとに取り上げる事はできなかった。



3号溝状遺構近景



3号溝状遺構遺物出土状況



3号溝状遺構杭列出土状況

杭列（第4図）

溝状遺構内西側で検出された木杭列である。調査区北側隅では、横倒しとなっているものが多いが、これは工事による床掘りのためであり、本来は、溝状遺構西側肩に沿って、直線的に打たれていたものと想定できる。性格については、現状では判断できないものの、平成5年度の調査状況よりも考えても、溝自体を護岸するためのものと言えるであろう。

足 跡（第7図）

遺構は水浸面と考えられる白色砂層直下に存在しており、溝状遺構の両側で二群の足跡と第1地点東半部で農具の痕跡を検出している。

調査時において、青灰色シルト質土の直上に3cm程の白色砂層が被っていたが、この砂層除去後に残った窪みの形状より判断して足跡とした。また、概ね、9cm～20cm程の大きさのものが大半であった。

第1足跡群（西側）

溝状遺構より2.5m程離れた場所で検出しているが、複数人分のものと考えられる。検出状況から考えると北側より南へ進み、また、北側（北西）へ戻ったと想定できる。

第2足跡群（東側）

溝状遺構より2.0m程離れた場所で検出したものであるが、第1足跡群よりは残りは悪い。形状より複数人分のものであろう。

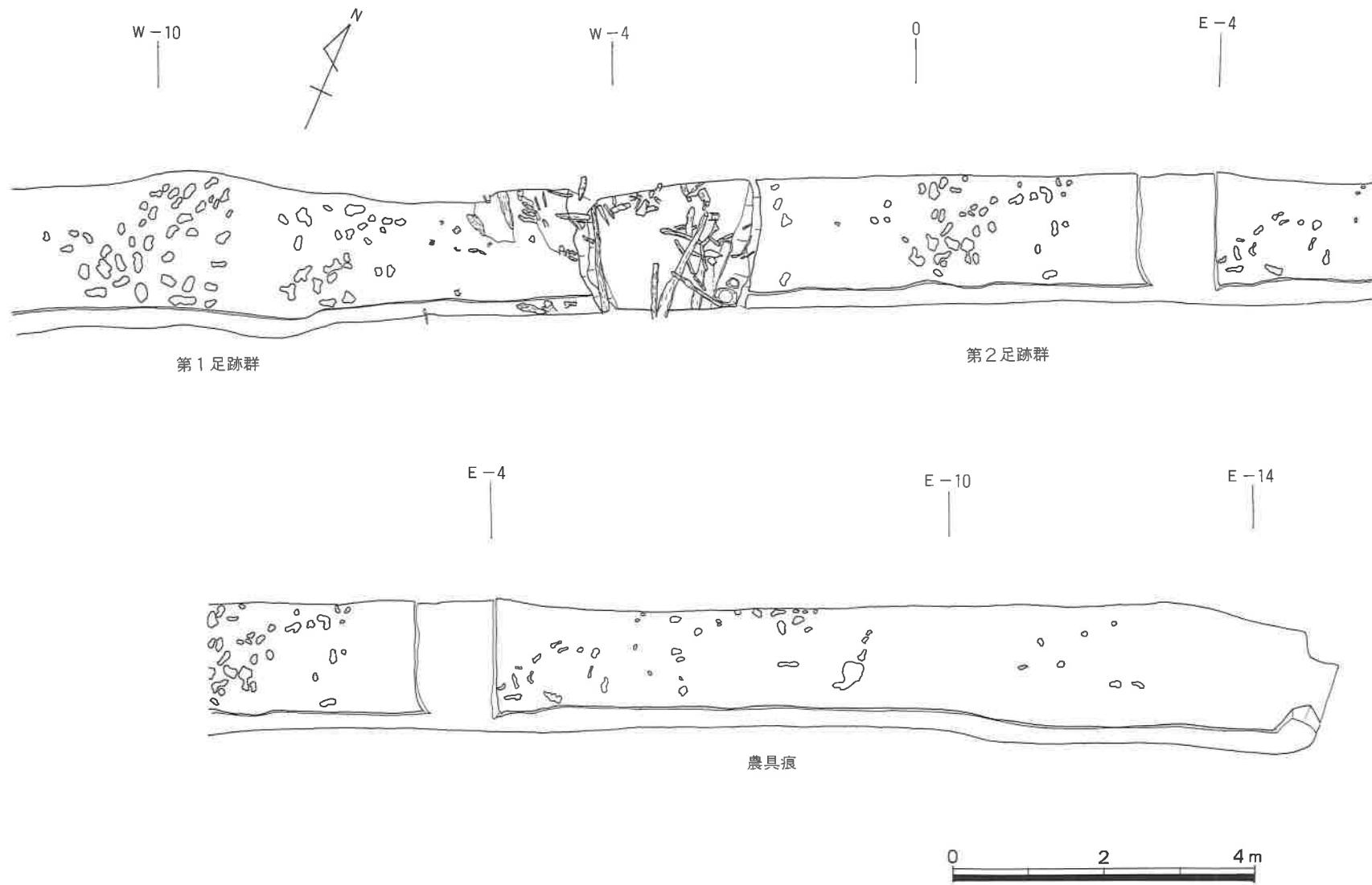
農具痕

第2足跡群の東側に拡がる。足跡群の形状とは異なり、幅3cm、長さ12cm程の長方形を呈し、深さはまちまちであるが、その形状より判断して、鍬等による掘削の痕跡であろうかと思う。



足跡検出状況

第7図 足跡実測図 ($S=1/80$)



出土遺物（第8図～第12図）

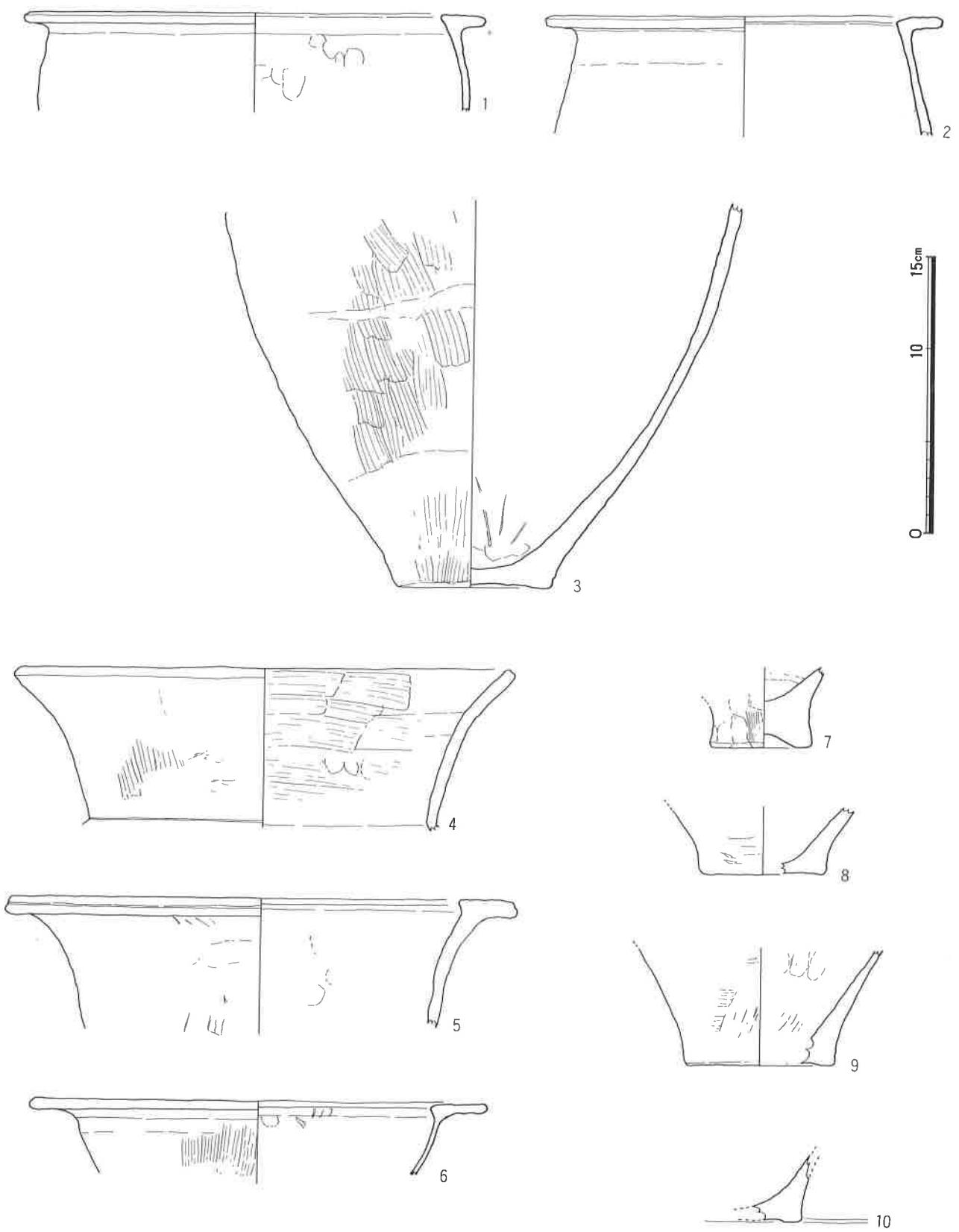
溝状遺構

1～45は、溝状遺構出土土器である。以下、順次説明を加えたい。

1、2は中型の甕形土器口縁部片である。1は口縁逆L字状を呈するもので内外面ナデ調整。内面には指頭圧痕も残る。色調は暗褐色、胎土には微砂粒を多く含み、焼成は良好である。口径25.2cmを測る。2は胴部が直線的なもので、口縁も水平気味となる。内外面ナデ調整を施す。色調は黒褐色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。口径21.6cmを測る。3は溝上層部で出土した中型の甕形土器胴下半である。卵型の胴部よりやや上げ底気味の底部へ至る。また、粘土紐の接合痕が顕著に観察できる。調整は、外面にはハケ調整を、内面にはナデ調整を施す。色調は、暗褐色、砂粒を多く含み、焼成は良である。現存高21.0cm、底径9.0cmを測る。4、5は広口壺の口縁部片である。4は頸部より直線的に開くもので、口縁端部は丸く収められている。外面ハケメ調整後、ナデ、内面ハケメ調整。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色、焼成は良好である。口径26.6cm。5は口縁部が鋤先状を呈するものである。内外面、ナデ調整。胎土には砂粒を含み、色調は灰褐色、焼成は良好である。口径27.0cm。6は口径24.4cmを測る高壺である。体部は丸みが強く、口縁部は平坦で鋤先状を呈す。外面、ハケメ調整。胎土には砂粒を若干含み、色調は褐色、焼成は良好である。7～10は甕形土器の底部片である。7は上げ底を呈している所謂「亀ノ甲」タイプのもので、ナデ調整により底部を仕上げる。胎土には砂粒を多量に含み、色調は赤褐色、焼成は良である。底径5.5cmを測る。8は底径6.4cmを測る小型のもので、全体的に丸みが強い。胎土には砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成は良。9は底径7.8cmを測り、直線的に開く。内外面ハケメ調整後ナデ。微砂粒を含み、色調は灰褐色、焼成は良である。10は細片であるが、9に近いものであろう。色調は褐色であり、焼成は良である。7は弥生中期初頭であり、その他は中期後半代に収まるものである。

11～22は甕形土器口縁部片である。11は口径19.2cmを測る中型のものである。内外面、細かいハケメ調整を施す。12は丸みをもつ胴部から「くの字」に立ち上がる口縁部を有するもので、口縁端部は丸く収められる。外面ハケメ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を含み、色調は黄褐色、焼成は不良である。口径17.2cm、現存高10.4cmを測る。13は口径16.6cmを測る小ぶりのもので口縁下部に凸帯を持つ所謂「亀ノ甲」タイプのものである。内外面ナデ調整、微砂粒を含み、色調は黄白色、焼成は良好である。14は12に近い。内外面大小2種類の板ナデを施し、外面には工具の痕跡が顕著に観察できる。胎土には微砂粒を含み、色調は黒茶色、焼成は良である。口径19.6cmを測る。15は頸部のしまりの強いもので、内外面ハケメ調整後ナデ調整を施している。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶色、焼成は良である。口径27.6cmを測る。16は比較的、器壁が薄いもので、内外面粗いハケメ調整を施す。17、18は内外面板ナデを施している。19～21は口縁「逆L字」を呈する甕形土器である。22は如意形口縁のもので、色調は黒色を呈している。23は複合口縁を呈するもので、内外面板ナデを施している。色調は明黄褐色で、焼成は良好である。24は甕形土器胴部片で、比較的、器壁は薄い。内外面細かいハケメ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は暗黄色、焼成は良好である。25は15に近いタイプの胴部片であり、内外面ナデ調整が施されている。胎土には微砂粒を含み、色調は淡茶褐色、焼成は良である。22は弥生前期中頃、13は中期初頭、19～21は中期後半、23は後期前半代、16、24は終末期に近い。その他は概ね、後期中頃の時期であろう。

26は頸部に凸帯を有する壺形土器で、外面は丹塗りの痕跡が観察できる。外面板ナデ、内面ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、色調は明黄色、焼成はやや不良と言える。27は広口の壺形土器片であり、頸部のしまりはあまく、口縁部へ至る。外面ハケメ調整、内面にはナデ調整による指頭圧痕が顕著に観察できる。胎土には微砂粒を若干含み、色調は明白色、焼成は良である。28は短頸壺の口縁部片である。頸部のしまりはなく、内外面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を多量に含み、色調は暗茶褐色、焼成は良である。29は頸部に一条の凸帯を持つ壺形土器で、中型品と呼べる。内外面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を多く、色調は黄白色、焼成は良と言える。30は細片で全容は不明であるが、杯部の1／3位より屈曲する高坏と考えられる。内外面ハケメ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は淡茶褐色、焼成は良である。31は袋状口縁壺の細片であり、全容はつかめない。色調は黄白色、焼成はやや不良と言える。32は丹塗りの壺形土器頸部片である。内外面ナデ調整。胎土には砂粒を含み、色調は黄白色、焼成は良である。33～36、38～40は甕形土器、37は壺形土器の底部である。33は平底に近いもので、立ち上がり付近は丁寧に整形している。外面ハケメ調整、内面ナデ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は淡黄褐色、焼成は良である。底径9.4cmを測る。34は底径8.2cmを測るもので、外面にはナデ調整による圧痕が顕著に観察できる。砂粒を若干含み、色調は赤褐色、焼成は良と言える。35は比較的厚みのある底部であり、内外面ハケメ調整を施す。胎土には微砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。底径7.2cmを測る。36は上げ底となる小さめの底部であり、外面ハケメ調整、内面ナデ調整を施す。砂粒を若干含み、色調は暗黄白色、焼成は良好である。底径6.0cmを測る。37は壺形土器の底部であろう。底径7.3cmを測る平底気味の底部から丸みのある胴部へと続く。内外面ナデ調整であり、内面には整形時の工具の痕跡が認められる。砂粒を若干含み、色調は黄褐色、焼成は良好と言える。38は平底から直線的に開く胴部へ続くもので、内外面ハケ調整後、ナデ調整により整形している。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄褐色、焼成は良である。底径7.3cmを測る。39は比較的残りの良い甕形土器胴下半部であり、平底から直線的に開く胴部へと続く。外面には1.2cm幅程の工具によりハケメ調整を施し、内面はそれをナデ調整により消している。胎土には砂粒を含み、色調は赤褐色（内面黄白色）、焼成は良である。底径11.0cm、現存高17.2cmを測る。40は破片資料であり、全様はつかめない。微砂粒を含み、色調は褐色、焼成は良と言える。41は、溝状遺構上層で出土した完形の椀形土器である。器壁は厚く、平底の底部より球形状の胴部へ至り、口縁部は丸く收められる。調整は内外面ナデ調整であり、立ち上がり付近は丁寧に整形される。胎土には砂粒を多く含み、色調は明褐色、焼成は良好である。口縁径10.4cm、底径6.0cm、器高7.0cmを測る。42は丹塗りの土器で、破片資料のため、傾きには確証はない。胴部が極端に張ったタイプで、平底の底部が付くものであろう。調整は外面ミガキ調整、内面板ナデとナデ調整であり、内面最大径と付近に爪の圧痕が観察できる。胎土は微砂粒を僅かに含むが、精良な粘土と言え、色調は外面は丹塗りのため赤褐色、内面は淡茶色を呈している。焼成は良。43はやや小ぶりの器台である。接地部は丸く收められ、体部は筒状を呈す。外面ハケメ調整、内面ナデ調整を施す。砂粒を多く含み、色調は暗褐色、焼成は良である。底径8.8cm。44は高坏の脚部であり、接地部より5cm程の高位に孔が穿たれている。調整は内外面ハケメ調整で、内面には棒状工具によるしづりの痕跡が認められる。微砂粒を多く含み、色調は明褐色、焼成は良である。底径17.8cmを測る。45は所謂「沓形」を呈す支脚である。微砂粒を多く含み、色調は黄褐色、焼成は良である。



第8図 出土遺物実測図 I (S=1/3)



1



2



3



4



7



5



8



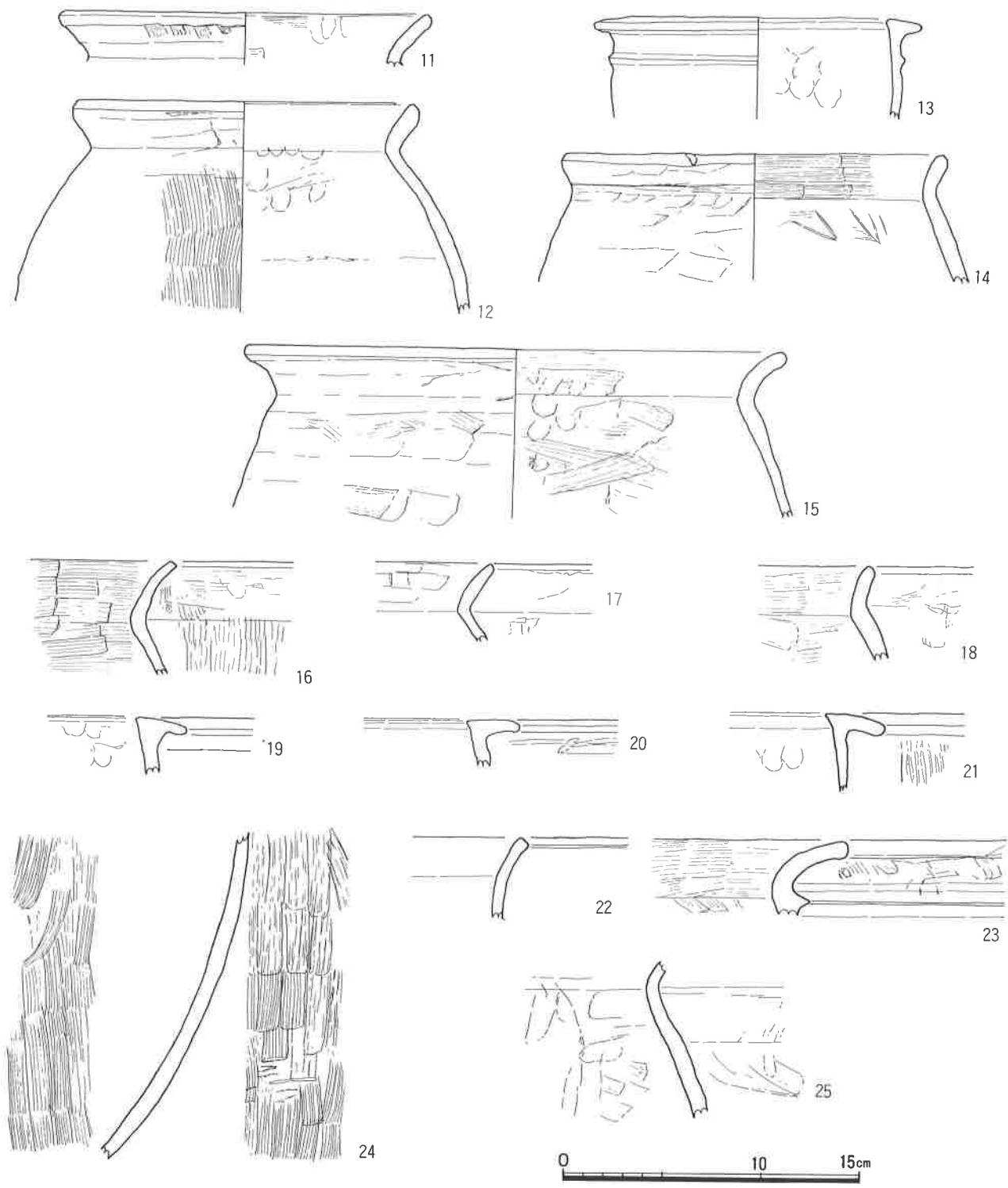
6



9



10



第9図 出土遺物実測図Ⅱ (S = 1/3)

26は前期末～中期初頭、36は中期初頭、33、34、35、38、39、42、44は中期後半、27、31、32は後期前半代、30、41は後期中頃、28、43、45は後期後半と考えられよう。



11



13



12



14



15



16



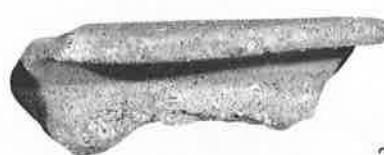
17



18



19



20



21



24



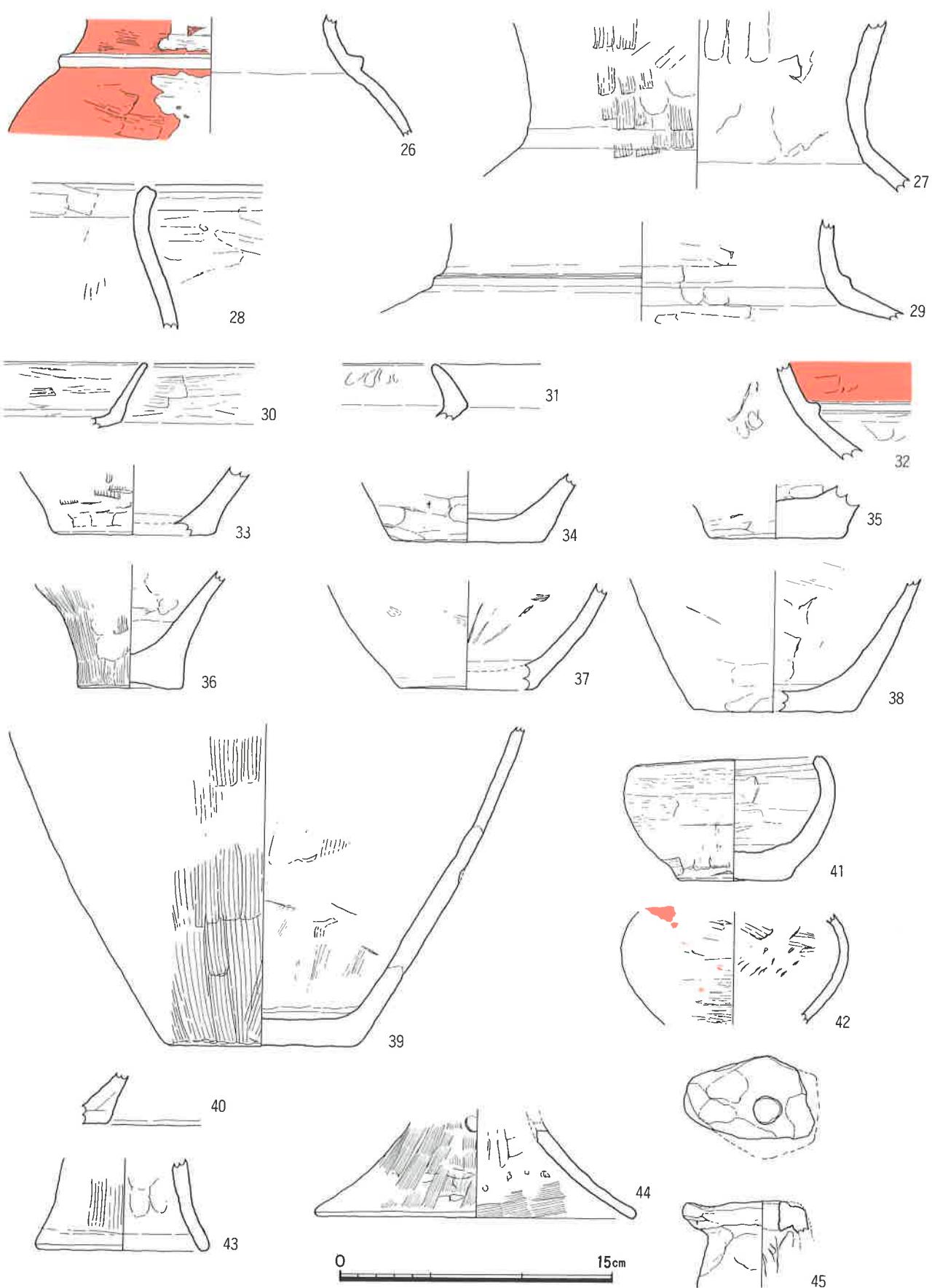
22



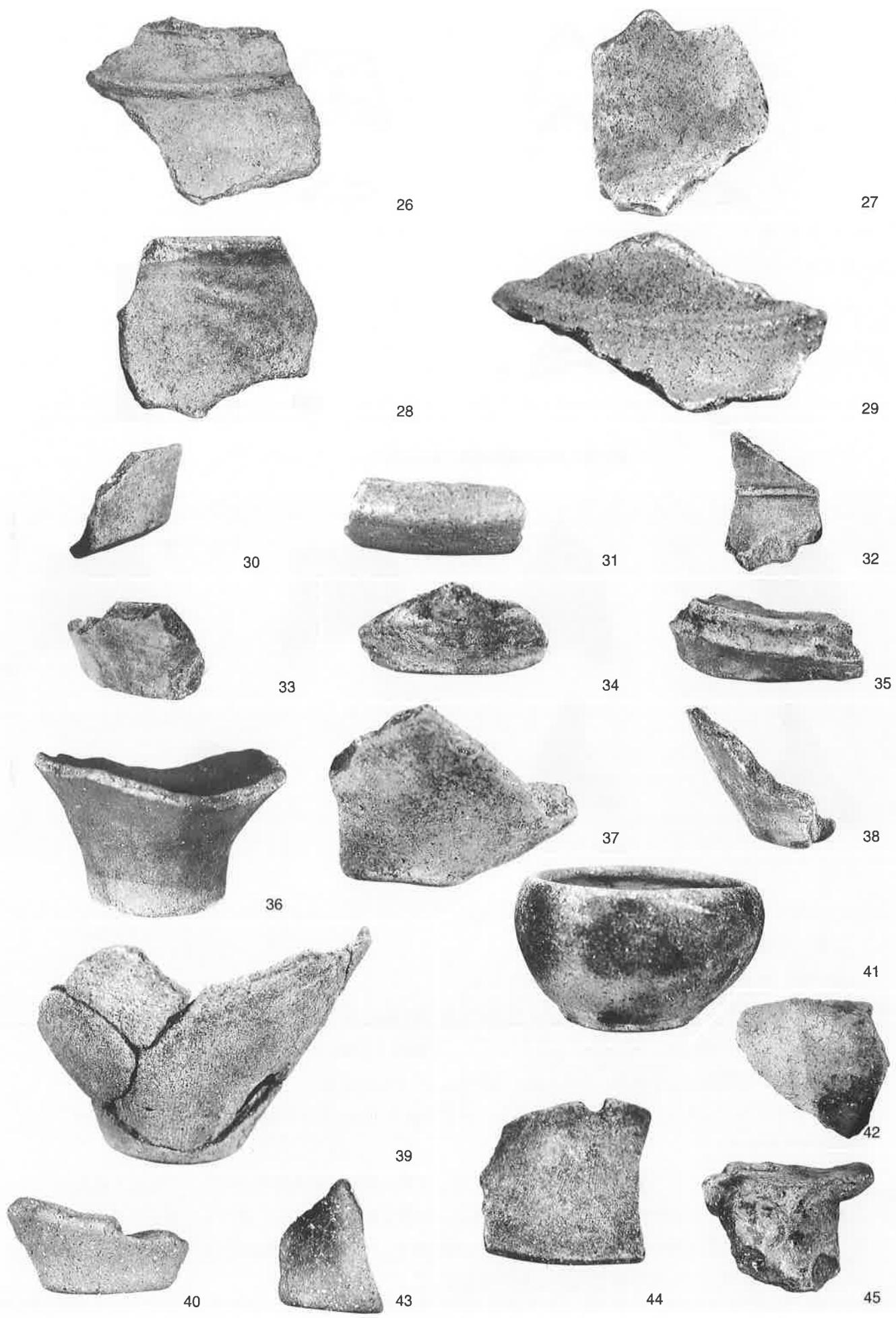
23

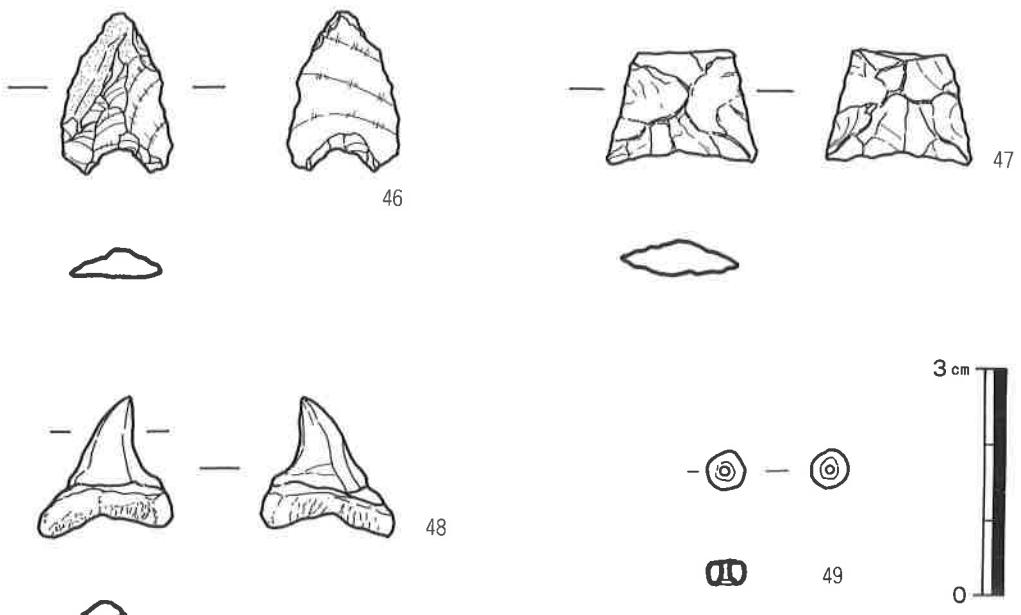


25

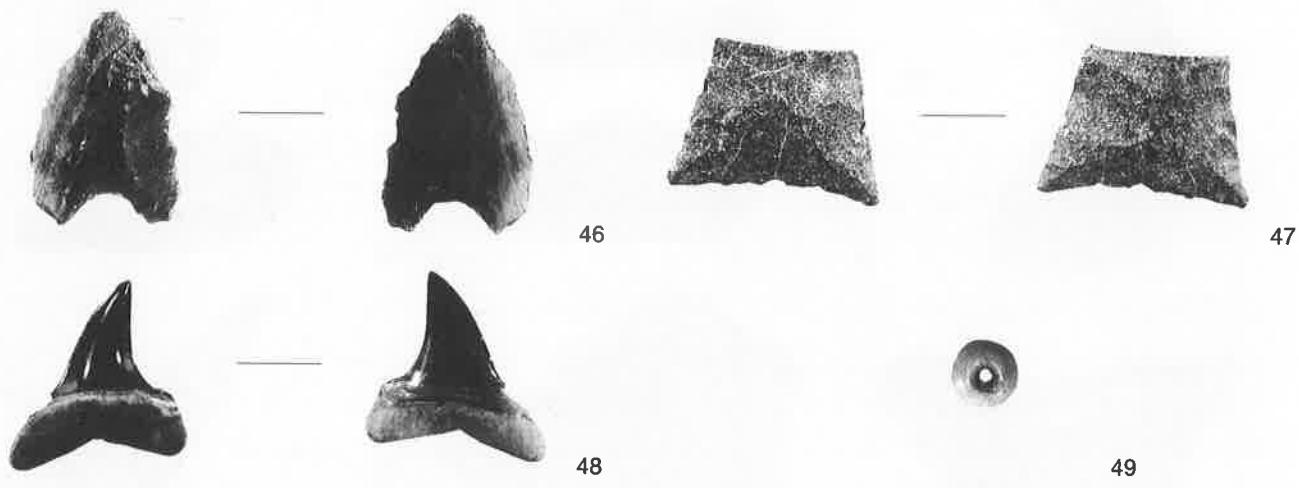


第10図 出土遺物実測図 III (S=1/3)





第11図 出土石鎌実測図 (S=1/1)



石器・玉類（第11図）

46～48、49は溝状遺構出土の鎌及び玉類である。

46は一部分自然面を残す凹基鎌である。全長2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。黒曜石製。

47は全長1.5cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmを測るもので、先端部は欠損している。粘板岩製。

48は鮫の歯を使用した骨鎌で、全長1.8cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る。

49はガラス小玉であり、グリーンを呈する。長さ5mm×6mm、厚さ3mmを測る。中央に1mm×1.5mmの孔を穿つ。

鎌類やガラス玉といった副葬品の混入については、近隣に何らかの遺構が存在し、これより混入したものと考える方が妥当であろう。平成5年度の2次調査時においても、溝内より管玉1点が出土、周辺より甕棺墓1基が検出されている状況を考えると、今回の調査地点近辺にも墳墓若しくは、住居等が存在している可能性は高いものである。

第2地点（第3図・第12図）

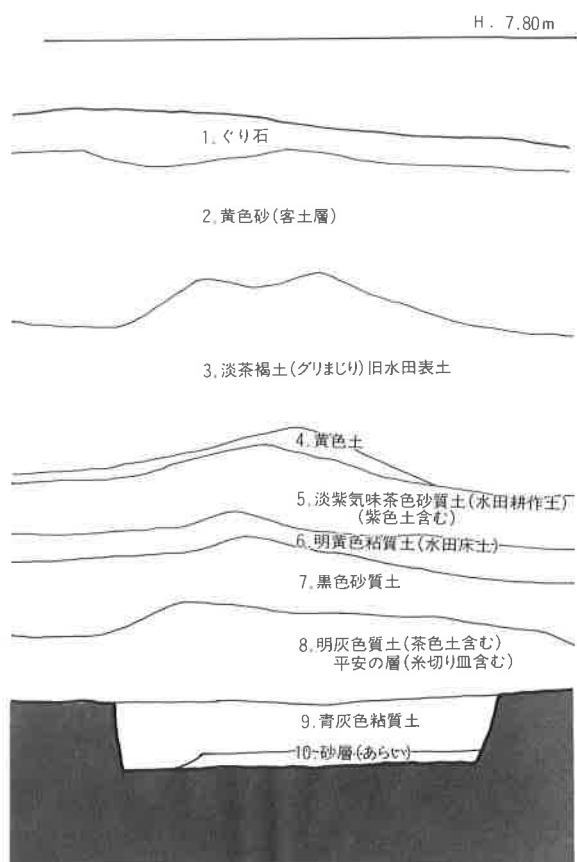
工事による床掘りでは、遺構面である青灰色シルト質土までは達しておらず、現状では、弥生期の遺構は認められなかった。また、中世の面と考えられる青灰色粘質土でも東側に傾斜変換線が確認されたのみで、遺構検出時に糸切りの土師皿が1点出土したのみである。

同地点での土層観察においては、旧水田面である淡茶褐色土、黄色土（床土）以下に明黄色～明灰色の粘質土と砂質土が堆積しており、青灰色粘質土（中世）以下にも砂層や暗黒茶色粘質土が確認されている。このため、下層に弥生期の遺構が存在する可能性が高かったが、調査区の関係上、発掘はできなかった。

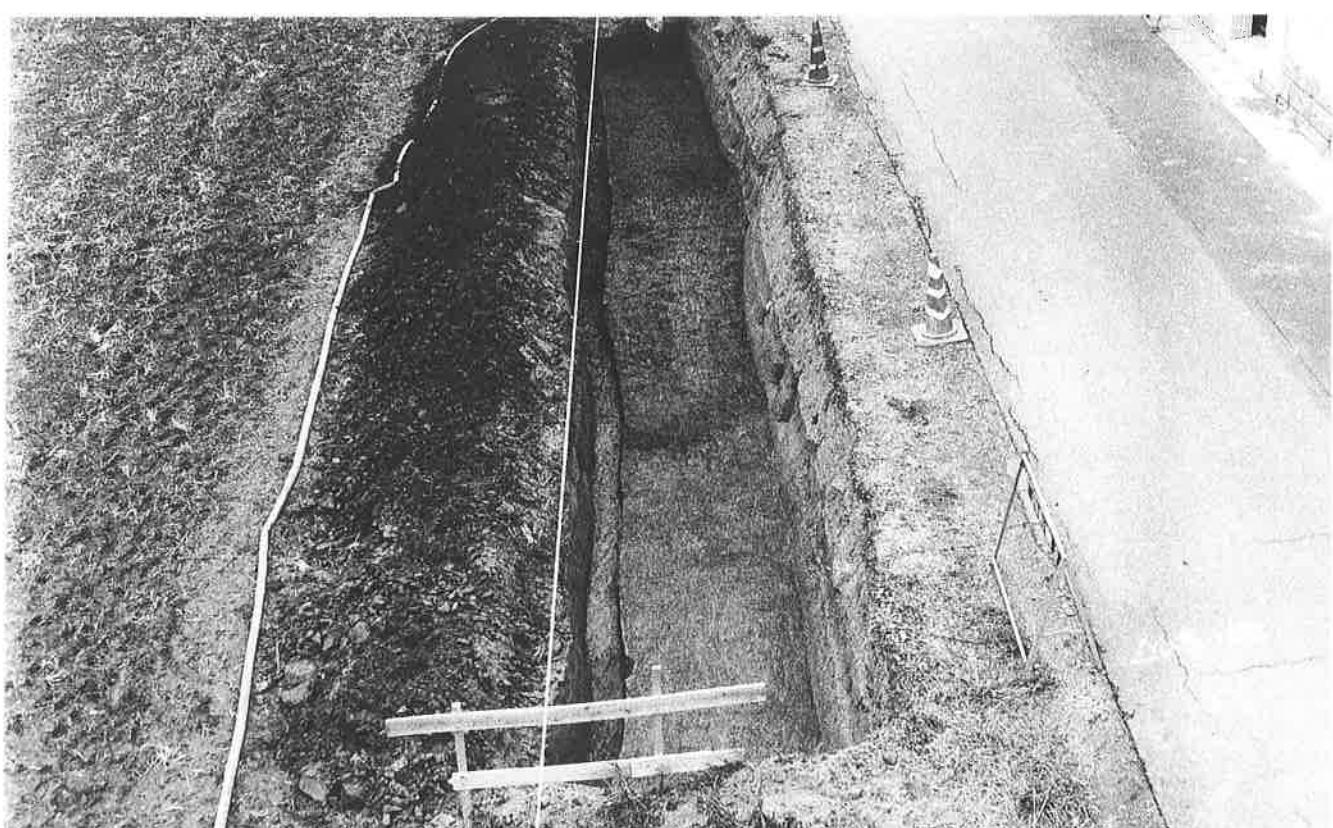
出土遺物（第13図）

50～57は第2地点の包含層及び遺構検出面出土の土器である。順次、説明を加える。

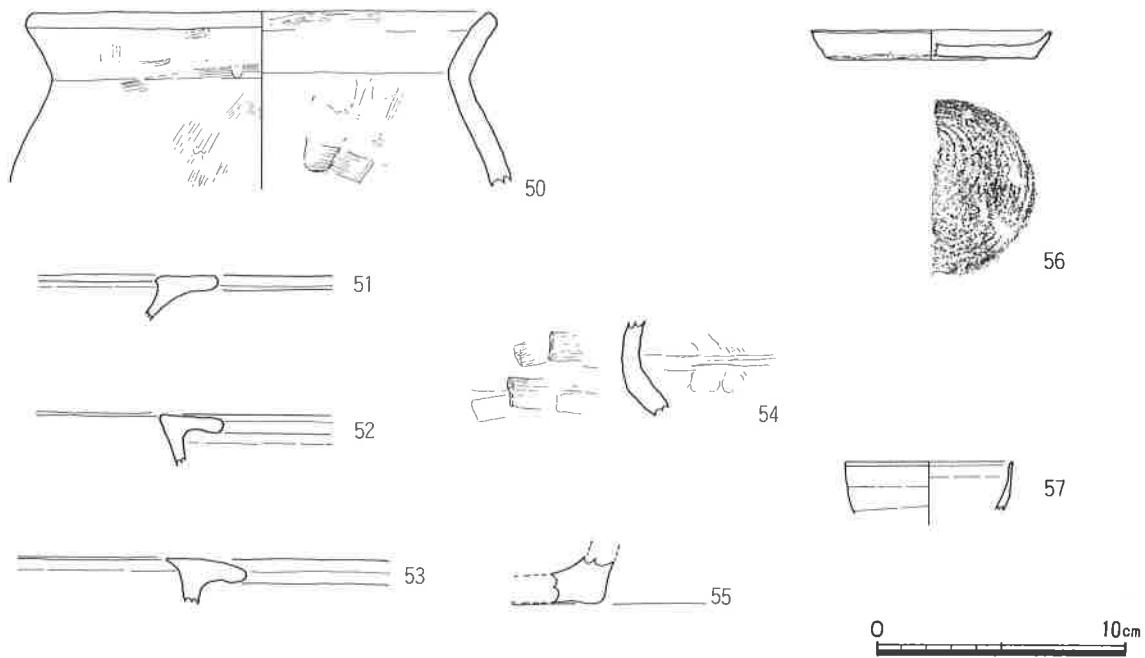
50は口縁「く」字形を呈する甕形土器である。
調整は内外面ハケメ調整後ナデ調整を施す。



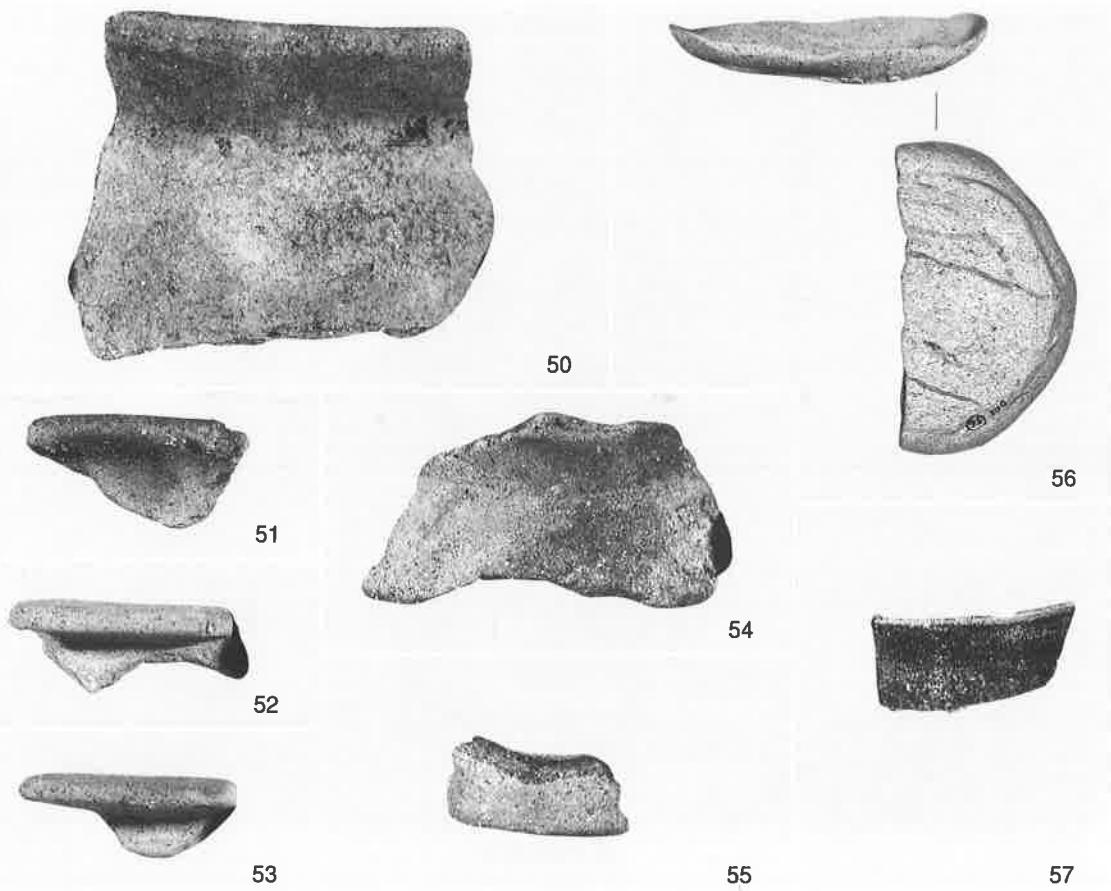
第12図 第2地点基本土層図



第2地点全景



第13図 第2地点出土遺物実測図 (S=1/3)



胎土には微砂粒を含み、色調は暗褐色、焼成は良好である。口径18.6cmを測る。51は口縁「鋤先」状を呈すものであるが、細片のため全様はつかめない。色調は褐色で、焼成は良である。52は甕形土器の口縁部で、断面「逆L字」形を呈す。胎土には砂粒を多く含み、色調は明褐色、焼成は良である。53も口縁部が「逆L字」形を呈す甕形土器である。胎土には砂粒を多く含み、色調は褐色、焼成は良である。共に細片のため、全様はつかめない。54は壺形土器の頸部片である。調整は外面ナデ調整、内面板ナデを施す。砂粒を多く含み、色調は褐色、焼成は良と言える。55は甕形土器の底部であるが、全様はつかめない。微砂粒を多く含み、色調は赤褐色、焼成は良である。56は土層観察時に出土した土師皿である。口径9.8cm、底径8.0cm、器高1.2cmを測り、外底部には糸切りの痕跡が顕著に観察できる。胎土には微砂粒を多く含み、色調は灰白色、焼成は良好と言える。57は黒色の釉をかけた小ぶりの碗である。胎土には微砂粒を若干含み、色調は茶色（黒色釉）、焼成は良好と言える。口径6.8cmを測る。50は弥生後期後半、51～55は中期後半代、56は13世紀代、57は15世紀代であろう。

3.まとめ

石崎 大坪遺跡第3次調査の成果を要約すると以下のとおりである。

本遺跡は、平成5年度に調査した水田遺構に伴う用水路（3号溝状遺構）の延長部分に当たり、溝状遺構とその周辺部の足跡を検出している。水田部分については、調査区の関係上より、検出できなかつたものの、この地点までは水田部が広がる事は確実であり、なお、北側へ続く事も想定できる。今後、丘陵北東側におけるどの範囲までに弥生期の水田が広がるかが調査の課題となるが、丘陵とほぼ平行して走る溝状遺構を中心に丘陵北側部の先端までの広域となる可能性は高い。

溝状遺構内での遺物について検討してみたい。第2次調査での状況では、弥生早期の遺物が含まれていたのに対し、本地点では弥生時代前期中頃～後期後半までの幅広い遺物を出土しており、概ね、中期後半～後期前半代のものがその主体を占めていた。この事は、丘陵南西部を中心に水田の開墾が始まり、中期後半以降に北東側へ過耕地を求めて、拡散していく事を示唆しているものと考えられる。また、溝状遺構の幅や形状にも若干の違いが認められる事を考えると溝自体のつけ変え、または、掘り直しの可能性も否定できないものであろう。

遺物自体については、土器、石器、ガラス玉が出土しているが、溝状遺構埋土で出土している骨鏃が注目されよう。鏃としては、多少異論もあるが、平成元年度の矢風遺跡第1次調査における甕棺内より打製石鏃とともに同様の骨鏃が数点出土しているため、鏃として認めている次第である。また、今回のものについても時期の設定には疑問は残るもの、前述の甕棺の時期より判断して、弥生時代前期中頃となる可能性がある。

最後に遺跡群の中心たる石崎丘陵東側一帯の弥生期の状況について、考察の章で、論述しているため、参考としていただきたい。

第IV章 考 察

石崎地区遺跡群について

石崎地区遺跡群は、昭和54年の「石崎 曲り田遺跡」（バイパス建設）における弥生早期の住居群出土という発表により、一躍脚光を浴びた。また、これを始めとし、これまで、ほ場整備事業、町スポーツ公園建設、JA支社建替などで、10次にわたる発掘を実施してきているが、各調査区とともにその調査成果は多く、糸島地区のみならず、我が国の弥生文化の研究に大きな影響を与えるものと言える。ここでは、これまでの調査成果をふまえて、同地区における弥生時代の社会状況などを考察してみたい。

1. 遺跡群の内容

①五久遺跡

石崎地区での遺構の発見については、1952年に原田大六氏が「上下共に夜臼式土器を用いた合せ甕があった」と言う報告を『考古学雑誌』に掲載しており、これが初見と言える。又、当時作成の分布地図には「五反」の名称があり、沼丘陵西側一帯の字五久地区を指していると考えた方が妥当である。また、想定の域は出ないが、隣接する矢風地区よりは支石墓を含む早期～前期の墳墓群が出土しているため、五久出土の棺は弥生早期の丹塗磨研した壺棺となる可能性が高く、注目される事例と言える。

②石崎 小路遺跡

石崎丘陵最南端にあたり、現在の県道大野城二丈線あたりとなる。複数の甕棺墓が出土したらしく、副葬品として勾玉1個、管玉120個が知られている。（東京国立博物館蔵）原田大六氏の報告によると甕棺の形式は「須玖式」とされ、中期代の遺構の調査例が少ない同地では首長層の墳墓となる可能性も捨て難いものである。

③長石遺跡

石崎丘陵の東南に位置している沼丘陵上に立地し、弥生時代後期終末の甕棺墓が知られている。所謂「神在式・福井式」甕棺と呼ばれるもので、現在、糸島高校郷土博物館に展示されている。この他では、昭和51年に個人による農地区画整理に伴い表土直下に甕棺墓群が発見されているが、正式調査は行われず、町職員のスケッチしか記録は残されていない。これによると終末期のものには見られない群集（列埋葬）している事が伺われる他、成人棺の大きさのものが多い点が認められる。

時期的な事については言及できないが、中期代として捕らえた方が妥当であろう。

④石崎 曲り田遺跡

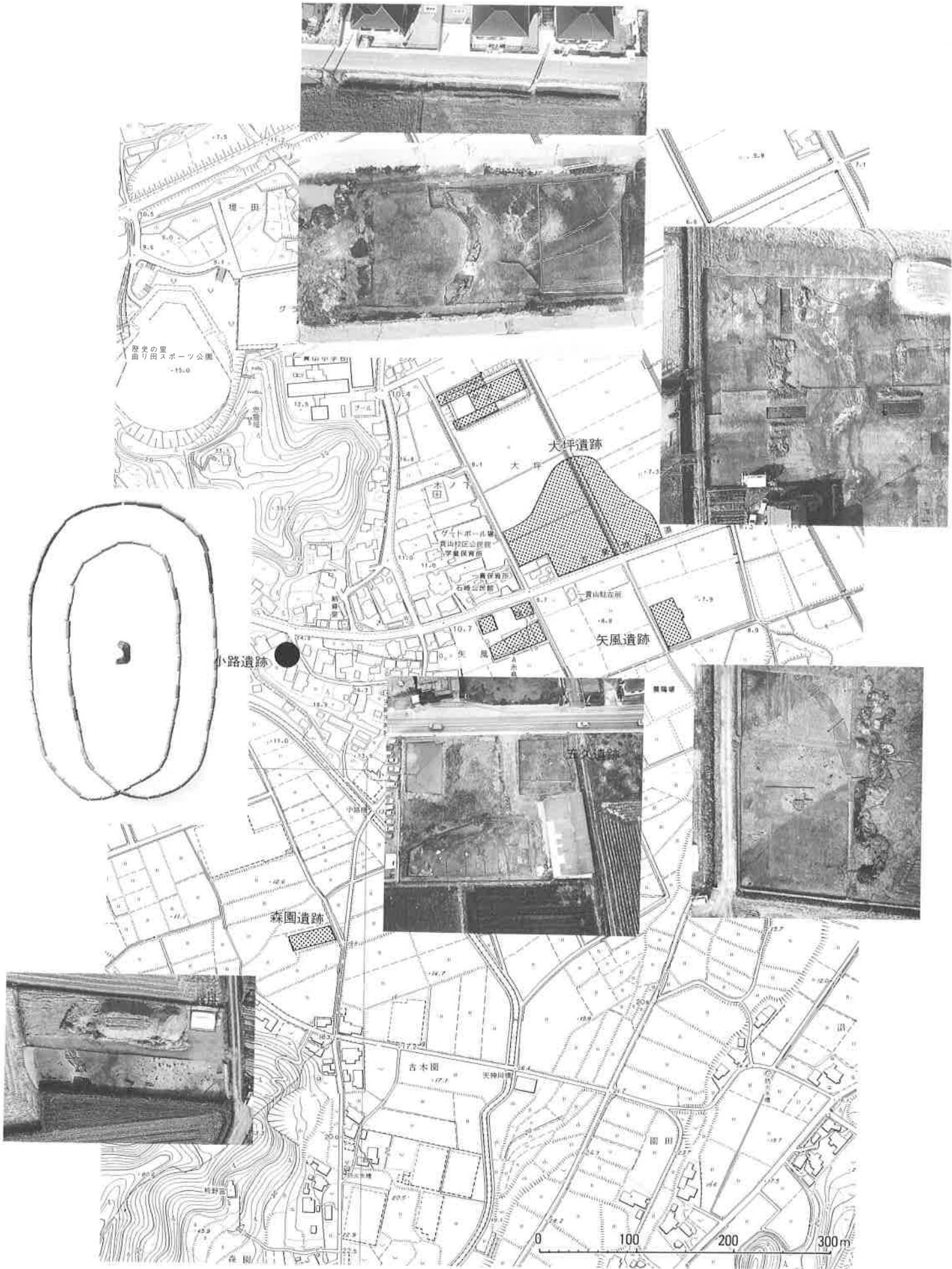
同地区での本格的な発掘調査としては、昭和54年～55年に行われた国道202号線バイパス工事に伴う「石崎 曲り田遺跡」の発掘調査が挙げられる。この遺跡は石崎丘陵鞍部に広がる集落遺跡であり、30棟の方形住居が検出された他、副葬小壺を持つ支石墓1基、甕棺墓11基など早期から前期にわたる遺構を中心として土器、磨製石器等が出土している。当地の立地については、後背湿地を持つ南西斜面にあたるため、稻作開始には最適地と考えられているが、面積的には狭いものと言える。注目された住居跡については、重複が激しいため、全様を把握できるものは少ないものの、残りの良い8号住居から判断すると一辺5.5mの方形を呈し、主柱は4本で、壁際には側柱を配している。また、奥内土壙を持つ等の特徴があり、弥生前期～中期代の住居に比べ、特異な形と呼べるものであった。この時期の住居資料が乏しい中で、検討するのはやや問題もあろうが、唯一比較できる江辻遺跡例では、直径4mほどの円形を呈しており、中央の焼土壙脇に2本の柱を持つ、所謂「松菊里式住居」と言われるものである。時期的に曲り田期の直後に位置付けられるものであるが、江辻以降についても今川遺跡の段階までは「松菊里式住居」が続いているため、弥生前期初頭代までの一般的な住居形態としては、円形を取るものが大半なのであろう。今後、韓国無文土器時代前期の住居形態との比較検討を十分に行う必要があろうが、曲り田、江辻両住居形態の間を埋めるものが、地域性または、時期差なのか、文化性が影響していると捕らえるべきかが課題となり、資料の増加が望まれるものである。

⑤大坪遺跡

昭和63年度、県営ほ場整備事業に伴う事前調査によって実施された同遺跡は、石崎丘陵東側の古環境をおおまかに掴めた貴重な発掘と言える。調査では、脊振山系の山々より低い台地が谷を挟んだ形で、石崎丘陵に東側に伸びており、この上を南側より北側へと蛇行する形で流れる幅12mほどの旧河川が走っているのが確認されている。この河川については、現町図及び旧字図等にも見られないものであり、古い段階で既に埋没していたものと考えられる。遺構的にみると河川の西侧流域一帯に、弥生時代早期～前期の遺構が乗っており、住居域や甕棺墓などの領域が確認されている。

⑥矢風遺跡

平成元年度、JA一貴山支所建て替えに伴う発掘調査であり、立地的には大坪遺跡と連続するもので、南側より伸びる低台地上となる。2,600m²の調査区より弥生早期～前期中頃にわたる49基の墳墓が検出されているが、その構成は支石墓4基、甕棺墓39基、木棺墓5基、土壙墓1基となる。また、出土した墳墓のうち、24号甕棺、42号甕棺は副葬小壺を持っており、志摩町新町遺跡の支石墓の段階から受け継がれた風習ととらえる事ができる。



第14図 丘陵南側遺跡配置図 (S=1/50000)

⑦曲り田周辺遺跡

町スポーツ公園建設に伴い昭和62年より平成3年まで調査が行われた。弥生期の遺構としては、昭和63年度の丘陵東側テラスで検出されており、中期後半代の小児用甕棺墓1基と後期後半の包含層より出土した広形銅矛の鋳型がある。これまで、伊都国を中心たる井原周辺でしか鋳型の確認がなされてなかった事を考えると、同地における鋳型の出土は、青銅器生産が各地で行われていた証しであり、極地点な生産状況を呈す奴国とは大きな違いがあるものである。

⑧大坪遺跡Ⅱ

平成5年、農業用貯水池建設に伴う事前調査として実施。糸島地区では初の確認となる水田遺構が検出され、同時に用水路と考えられる溝状遺構も検出されている。検出された水田部は2層あり、弥生時代中期後半の面（矢板列、杭列、足跡）と前期初頭前後（小区画長方形水田9枚）の面となる。このうち、前期の水田面では $20m^2 \sim 30m^2$ という面積でありながら、畔の補強のための杭や矢板等が出土しており、かなり完成された水田技術が伺われるものである。遺物では土器類の他、木製農具も出土している。

⑨大坪遺跡Ⅲ

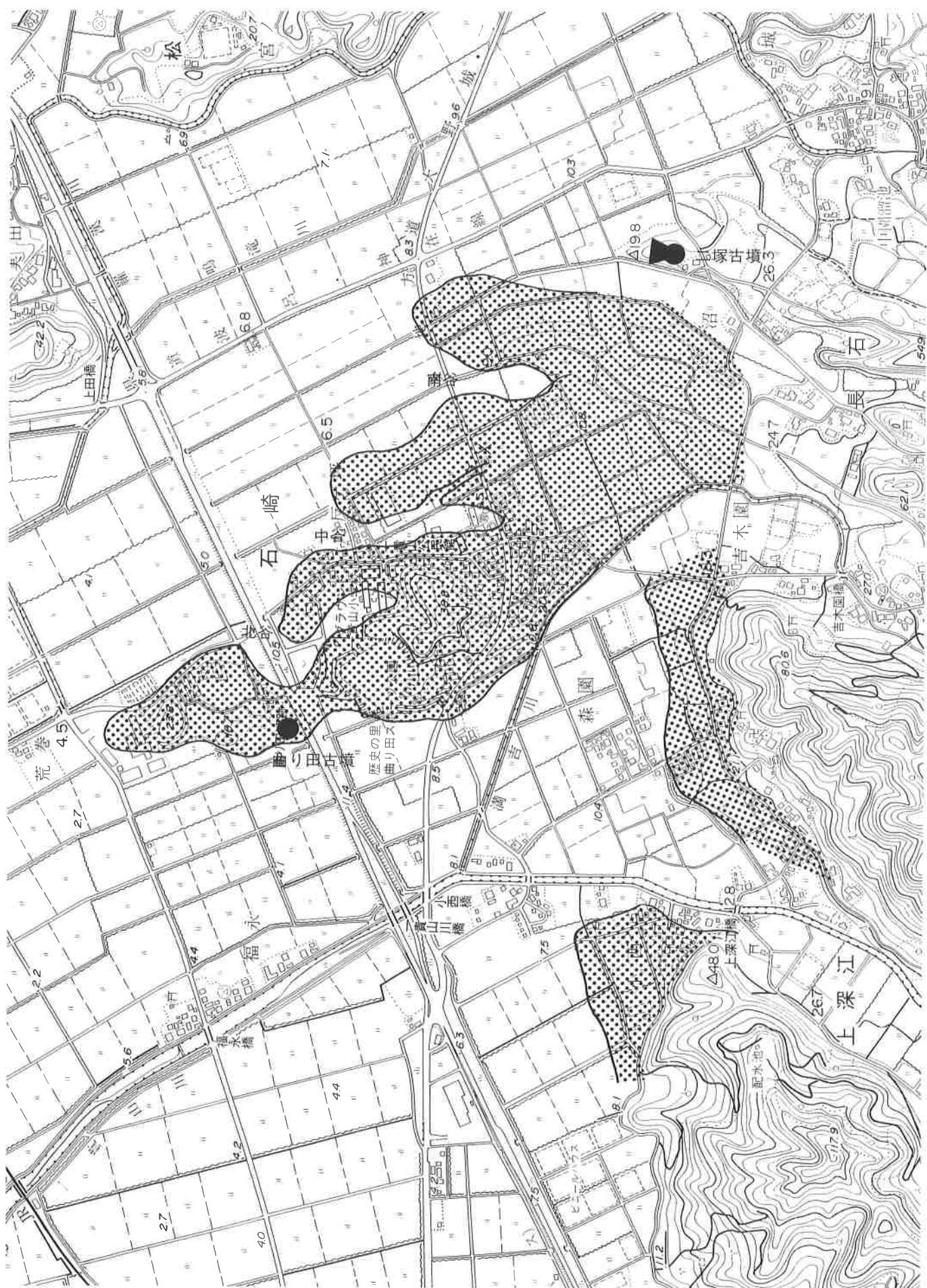
平成6年、町道拡幅工事により調査。大坪遺跡で検出していた3号溝状遺構の延長部分が確認されている。また、溝の両肩では、足跡、農具痕などが検出された。（本報告書）

⑩矢風遺跡 第2次調査

平成6年、個人農地の区画整理に伴い発掘調査を実施した縄文時代中期後半～弥生時代前期にわたる複合遺跡である。遺構は、縄文時代中期（阿高式期）の住居跡と柱穴状ピットが主体を占めるもので、弥生時代前期の甕棺墓2基も検出されている。同地は、支石墓を含む49基もの墳墓が検出された場所より、東へ100m程しか離れておらず、この間にも墓域が広がっているものと想定される。また、阿高式期の遺構の発見は、稻作開始のベースとなったものが、従来の縄文文化であった事を伺わせる貴重な資料であり、今後、周辺より後期～晩期の連続した遺構が確認されると確信している。

⑪森園遺跡

平成7年、個人農地の区画整理に伴い発掘調査を実施した弥生時代中期～古墳時代にわたる集落遺跡である。弥生期の遺構としては、2基の木棺墓と南北方向へ伸びる溝状遺構となるが、大野城二丈線周辺以外で墳墓が検出された事は特筆され、丘陵の南西側へは中期の遺構が広がる事を示唆する貴重な例と言える。検出された木棺墓の内、比較的遺存状況の良い1号墓は長軸174cm×短軸60cmを測るもので、棺内より赤色顔料が出土している。また、溝状遺構については、丹塗りのものや特殊器台も出土しており、祭祀関連のものとなるかもしれない。



第15図 石崎地区古地形復元図 (S=1/10000)

2. 石崎地区遺跡群の古地形

石崎丘陵を中心とする地域の地形は、現在、脊振山系より広がる微高地が北側へ広がり、その北西部に独立して低丘陵が立地している形を呈している。しかしながら、近年、発掘調査を進めいく中で、丘陵縁端部の広がりや大小谷部の抉入状況、旧河川の存在など徐々に判明してきている。

まず、谷部の抉入状況を確認したい。これまでの調査により、丘陵東側に3本の大きな谷部（仮に北谷、中谷、南谷と呼称しておきたい。）が確認されている。この内、最も北に位置する北谷は、202号線バイパスから抉入しており、大きく湾曲して、一貴山小学校グランドへと続いている。また、これより派生する小さな谷も存在している。次に中央の中谷では、石崎丘陵と微高地の中間部分に有り、北側より抉入して丘陵と平行している。また、東側の微高地上には、幅12mほどの蛇行した旧河川の存在が確認されている。最後に南谷であるが、石崎丘陵南東に位置する長石沼丘陵と中央の微高地間にあり、北側より抉入している。また、最北部は、河口地状に開くものと考えられる。このように大まかに地形を復元してきたが、過耕地になり得るべき形状や旧河川の存在から見て、生活環境的には中谷を中心とした部分が最適地と判断できるものである。

3. 稲作受容と広がり

次にこれまでの調査成果及び古地形の復元等より、石崎地区遺跡群の最重要課題である稲作の受容とその後の遺跡の広がりを考察してみたい。

同遺跡群の内、稲作開始期のまとまった遺構が検出されている地域は、石崎丘陵西側鞍部の南西斜面（石崎 曲り田遺跡Ⅰ）であるが、鞍部自体は1,900m²しかない狭い地域といえる。また、検出された30棟もの堅穴式住居も重複がひどく、比較的短期間で立て替えられたものと考えられる。後背湿地という初期稲作最適地の地形は呈しているものの、大坪遺跡Ⅱで検出した水田の形状からしても当初の稲作はかなりの技術を保って受け入れられた事が想定されるので、同地区での地形では中心部分となり得るべき場所とは考えにくいものである。では、これに代わる地域となる可能性が最も高い地域を考えてみたいが、これまで出土した遺構から判断すると丘陵東側にあたる五久地区より矢風、大坪地区にかけての中谷を中心とした微高地が最も適しているものとなろう。同地区だと旧河川を中心として稲作を展開する事が可能であり、比較的高所では居住区、墓域の区分けなどもなされている事を伺える遺構も検出されており、本格的な確認調査がまたれるものである。また、生産地としては前述の河川より引き込まれたものと考えられる溝状遺構（3号溝状遺構）がかなり北側へまで伸びており、後期前半代までの遺物の含む事を考えるとこの時期まで、過耕地として開墾が続けられ、水田域が拡大していったものであろう。

稻作需要後、弥生時代中期の段階での状況を検討してみたい。遺構の展開については、調査例が少ないものの、丘陵南端部（小路遺跡）及び丘陵の南側の微高地（森園遺跡）において墳墓が確認されている。前項でも記したとおり、小路遺跡の場合、その出土状況は不明ではあるが、少なくとも2基以上の甕棺墓があったと考えられ、勾玉1個、管玉117個を副葬していた事が知られている。現在、甕棺自体は所在不明となっており、その規模などは判らないものの、これを実見したと思わ

れる原田大六氏の見解によると「須玖式」とされている。しかしながら、質の良い硬玉製勾玉や比較的長めの管玉などの副葬品から考えると「汲田式」の新段階あたりと見るほうが妥当かもしれない。

次に森園遺跡の木棺墓であるが、立地的には中谷を中心とする微高地より西側に位置している。木棺墓は2基確認され、このうち1号棺では副葬品は持たなかったものの棺内に赤色顔料が検出され、塗布されていたものと考えられる。出土遺物が碎片（弥生中期後半）のため、時期には確証が持てないものの、隣接していた溝状遺構が中期中頃～後半代であるため、これに近い時期と考えている。中期代の住居跡が調査されてなく、居住区が判明していないものの、集落自体の中心が中谷より丘陵南西域に移っていったと考えられる資料である。今後、同地でのまとまった居住群の確認に期待したい。

最後に後期であるが、現在までのところ、北谷を中心とする丘陵北部と南谷を中心とする沼丘陵でかなりの遺構が確認されている。特に沼丘陵では、水路改修工事の際に住居跡の痕跡と共にかなりの遺物が採集されている外、後期後半～終末期の甕棺墓も見つかっている。また、現在でも農作業中に土器や石斧、石包丁が発見され続けている状況である。同様に石崎丘陵上でも北側を中心に多くの遺物が発掘されているため、この時期に両丘陵上に集落が拡散していったものと想定される。

4. まとめ

以上、これまでの調査成果を元に考察してきたが、要約すると以下のとおりである。

石崎地区遺跡群には、しっかりと繩文期の生活基盤があり、これを下地に朝鮮半島より完成された水稻作技術が中谷という適地に最初に受け入れられている。また、稻作の需要後では、北側へ耕地を広げながら集落規模を微高地へと拡大させていった事が考えられ、北側への耕地の拡張がある程度終了した後期の段階では北谷、南谷へと生産基盤を広げて行き、それを中心とした集落の形成へつながっていったものであろう。また、このことは、次代の古墳期の集落とも合致しており、北側の曲り田古墳、南東側の二塚古墳はそれぞれの盟主の墳墓として存在しているものととらえられるものである。

第V章 おわりに

本遺跡の調査は町道拡幅に伴う緊急発掘調査であり、町行政の中での文化財行政の位置付け、推進の難しさ等を考えさせられたものであった。それは現道拡幅という一般行政の担当者側では、気にも止めない範疇の中で、道路自体を永久構築物として認定している文化財担当者の認識の違いから来ており、計画段階での双方の説明、連絡不足の感は否めないものである。また、これにより今回、遺構の一部が消滅した事は文化財担当者のミスであると言える。この調査以後については、県道拡幅（二丈中学校校内遺跡）や町道新設（萩の原古墳群）工事に伴う調査を事前に実施しているが、今後、同様な事態を招かないよう注意して行きたい。

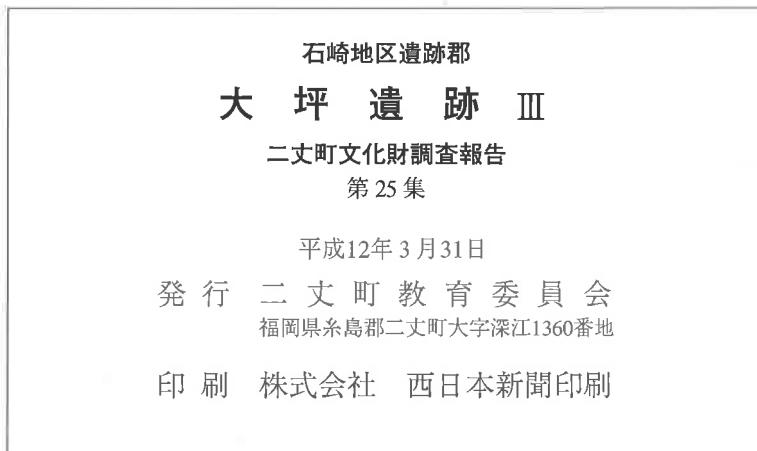
最後に末尾ながら、埋蔵文化財保護の重要性にご理解を頂き、ご協力頂いた工事受注者である井上興建の関係者の方々にお礼を記し、本書のおわりとしたい。

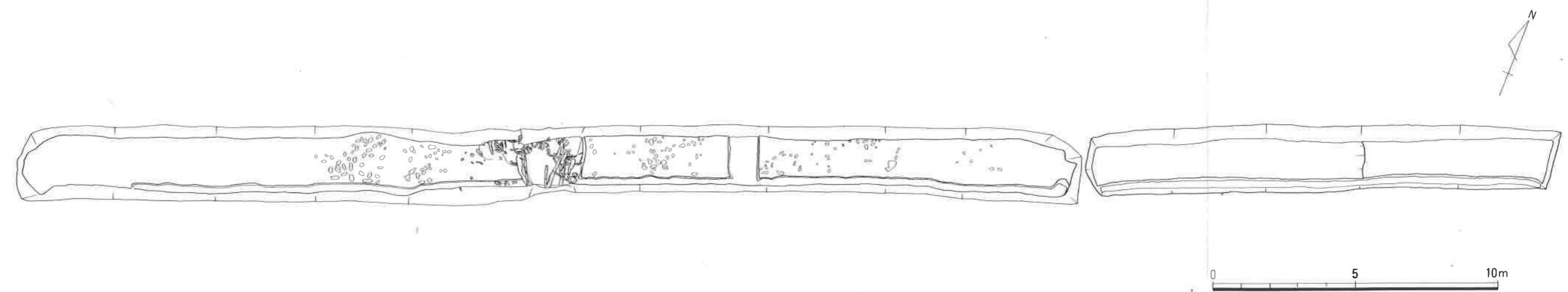
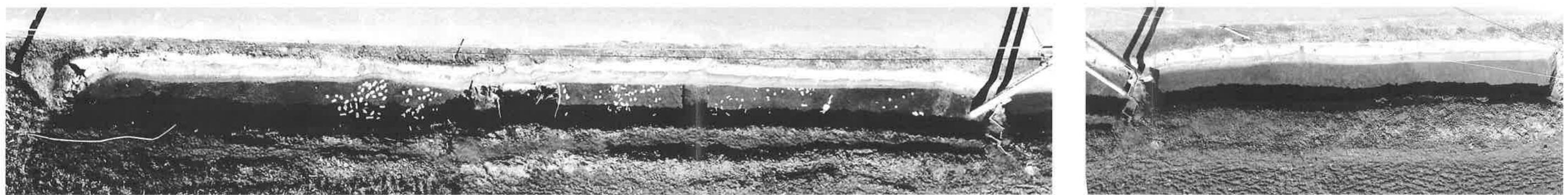
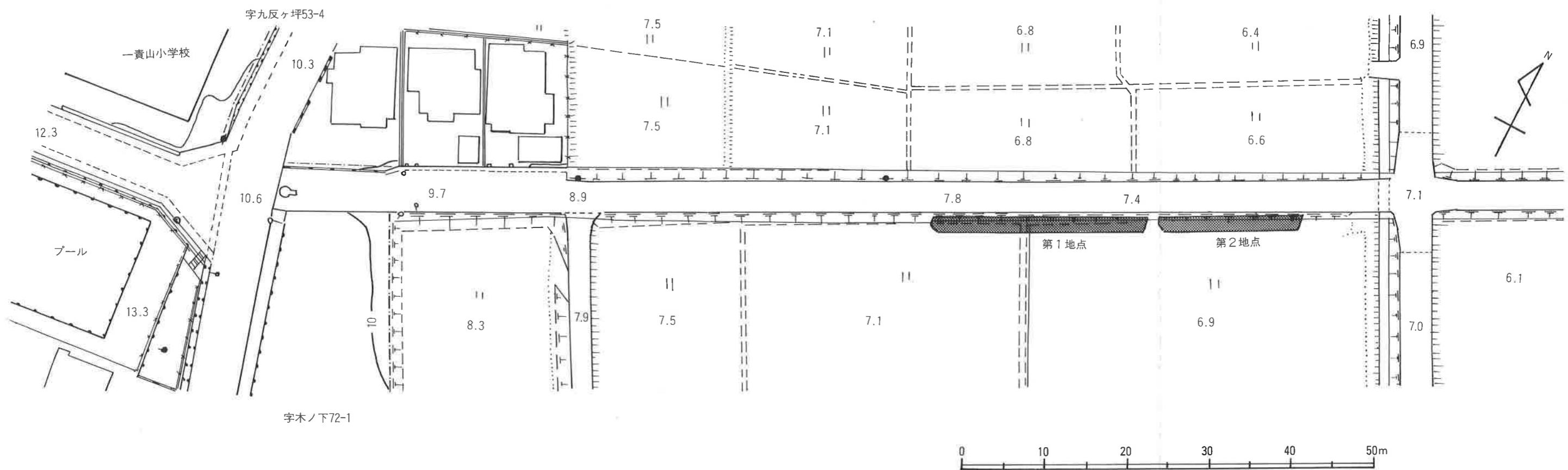
報告書抄録

ふりがな	おおつぼいせき						
書名	大坪遺跡Ⅲ						
副書名	石崎地区遺跡群						
卷次							
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第25集						
編集者名	古川秀幸						
編集機関	二丈町教育委員会						
所在地	〒819-1601 福岡県糸島郡二丈町大字深江1360番地 TEL(092)325-1111						
発行年月日	2000年3月31日						

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市長村	遺跡番号					
大坪	福岡県糸島郡 二丈町大字石崎 字大坪	40462		33° 34' 50"	130° 9' 59"	1993.11.19 ~ 1993.12.02	106m ²	町道拡幅 工事に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大坪	水田	弥生	溝状遺構 1	弥生土器 石器	稻作開始期の水田に伴う 溝状遺構





第3図 遺構配置図